

日本民家園だより

特集 旧三澤家住宅

vol.59

企画展示「伊那のくすり屋 - 信州・三澤家のくらし -」
2005年7月1日(金)～11月27日(日)
『日本民家園収蔵品目録4 旧三澤家住宅』刊行



▲移築前の三澤家住宅

【三澤家住宅】

神奈川県指定重要文化財・旧三澤家住宅は、昭和46年（1971）に長野県伊那市西町より移築されました。中に入ると広々とした空間のひろがる大きな建物ですが、移築されたのは主屋部分のみです。この主屋に続き、現地では老夫婦の寝起きする「隠宅」、薬の製造に使用された「文庫倉」、「味噌倉」、さらに農具を収める「作倉」と3棟の米倉が立ち並んでいました。敷地は間口7間半に対し奥行は30間もあり、街道沿いの民家の特色を示しています。

外見上もっとも特徴的なのはその屋根でしょう。「石置板葺」という形式で、クリ・ヒノキなどを割って作った板を、横木と石だけで押さえています。釘は使用しておらず、表がいたむと天地をかえしたり、隙間ができると別の板を差し込んだり、細かい手入れによって維持されていました。雪の多い地域でないため雪下ろしの心配はありませんでしたが、車の振動で板がずれたり、夏場は板が反って夕立の際に雨もりしたり、さまざまな苦勞があったようです。

【旅籠】

三澤家は、伊那街道の宿駅・伊那部宿で代々組頭をつとめていました。また、家業として薬屋と旅籠を営み、さらに広大な農地を経営していました。薬については後述することにし、ここでは旅籠と農地経営について紹介していきます。

三澤家で旅籠を営んでいたのは、幕末ごろから大正年間までです。屋号は「つちや」といいました。善光寺詣りや伊勢詣りの客が多かったようですが、このほか長野県知事や東京控訴院長、北白川家などの宿泊したことが記録に残さ

れています。一般の客は大戸口から入れましたが、こうした身分の高い客は門から入れて式台から上げ、カミザシキやザシキに通しました。

なお、門が設けられているのは、この住宅の特徴の1つです。当時、武士のほかは門を構えることが許されず、本陣や脇本陣以外ではほとんど見ることはできませんでした。しかし、三澤家は高遠藩に多額の献金をしたことにより家格が上がり、門構えを許されていたのです。

【農地経営】

毎年11月になると、三澤家では小作人が米を納めに来る風景が見られました。米俵を積んだ牛車は大戸からそのまま入り、土間を通り抜け、米倉の前につけます。そして、ここで品質検査をしたのち、1等米については「奥の倉」と呼ばれる一番奥の倉に納められました。この1等米は販売用で、虫を防ぐために燻蒸した後、扉の隙間に紙を貼って封印し、米の値が上がる翌年の土用まで絶対に開封しなかったといえます。

では、こうした農地経営のもととなる財産はどのように築かれたのでしょうか。実は、江戸時代からはじめた薬の製造販売業が明治期に大きく発展し、その収益が土地にまわされたのです。直接購入するほか、借金の担保として入手する場合も多く、やがて三澤家は、所有する土地60000坪、抱える小作人200軒という伊那一番の大地主となりました。

（渋谷卓男）



▲三澤家の屋根

[宿場と薬屋]

伊那街道は、長野県の善光寺へ参詣する旅人が多く、伊那部宿にも大勢宿泊したようです。旅先で急病になったとき、運良くその場に医者が居合わせるという可能性は低く、仮にいたとしても、かなりの高額になるので、旅人は薬を携帯して重宝したのでしょう。伊那部宿にも、6軒の薬屋がありました。そのうち、三澤家を含めて3軒は、自分たちで薬を作って売っていました。なかでも三澤家が、その規模と販売範囲から中心的存在であったようです。

[三澤家 売薬業のはじまり]

三澤家で薬が扱われていたのは、いまから170年ほど前の天保期（1830～1844）以前ではないかと考えられます。それは、薬の神である神農を信仰していたらしいことをうかがわせる文書が三澤家に残されていたからです。その文書は『神農講連名預物控帳』（天保13年）というもので、講の所有物を講中の組から組へ引き継ぐ際の控え帳と思われまます。このなかに三澤氏の名前が見えます。神農講は、神農にたいする信仰集団で、一般的には、薬に関する商売人が集まってそれを作っていました。したがって、この神農講に所属していた三澤氏が何らかの薬に関する商売を営んでいた可能性はかなり高いといえるでしょう。

[薬の種類]

三澤家にある『営業賣薬方劑寫』という明治時代の文書から、当時どのような薬が売られていたかがわかります。これは、明治9年（1876）から明治16（1883）年の間に、内務省から免許を交付された薬の名称と成分、効能を書き記したものです。この文書によると、当時三澤家で製造・販売された薬は、「神農感應丸」「犀角圓」「奇應丸」「起死回生寶丹」「萬金丹」「調痢丸」「實母散」「飛梅」「千金丹」「養血散」「養血圓」の11種類です。

なかでも最も売れた薬は「養血圓」です。主に女性が飲む薬で、「産前産後血之道一切ニ効アリ」とされました。

これらの薬は、漢方の生薬を「薬研」ですりつぶし、ふるいにかけて後、用途に応じてさまざまな形状に加工しました。

[行李をせおって]

三澤家では、伊那部宿の店のほかに、「売り子」が行李をせおって町や村の家々に薬を売ってまわりました。これを三澤家では「しよいあきない」と呼んでいました。「売り子」の出立は年1回で、行李を風呂敷に包んでせおっていきました。行李は5段重ねで、中に薬を縦置きにして入れていたそうです。訪問先の家では、前年置いていった薬をすべて新しいものに交換して、使った分だけの料金をもらいました。これは、富山の薬売りと同じ、いわゆる「先用後利」の方式です。引き取った古い薬は、行李の最下段に入れて持ち帰りました。

三澤家には、「売り子」がまわった家の所在地や、置いてきた薬の名称、数、金額が記載されている帳簿が残されています。これをみると、現在の愛知県・静岡県・長野県を2ヶ月程度で行商していたことがわかります。伊那街道を南下し、岡崎から東海道沿いの宿場や村を訪れていました。「千金丹」と「養血圓」がよく売れたようです。

[三澤家の薬、東京へ]

三澤家では、自店と「売り子」の行商による販売のほかに、遠方の薬屋に大量に薬を卸していました。たとえば、三澤家に残されている「養血圓」の納品控を見ると、納品先に「精錡水本舗 岸田吟香」の名が見えます。「精錡水」は、ヘボン式ローマ字で知られるアメリカ人宣教師ヘボン直伝の目薬です。ヘボンから製法を伝授された岸田は、この薬で成功を収め、銀座に大店を構えていました。三澤家はこの店に、明治11年に「養血圓」を50貼、13年に500貼ほど納品し、加えて「引札」を2千枚、「紙看板」を30枚など、今でいう販促物を納品しています。また、明治期の胃腸薬として名をはせた「寶丹」を販売していた上野池之端の守田治兵衛にも「養血圓」を卸していたことがわかっています。

このように当時の東京の有名薬店にも三澤家の薬が並び、明治期を通じて三澤家は大きく発展しました。

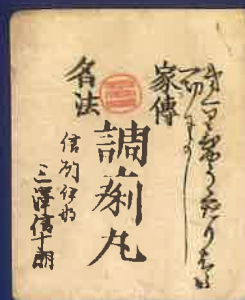
その後、三澤家はこのとき築いた財産を元手に新たな事業をはじめ、薬の製造・販売は次第に行われなくなっていくます。

（越川次郎）

三澤家薬関係資料



薬研
薬の材料を砕くのに使用されたもの。



薬袋「調痢丸」
調痢丸は腹下しの薬として服用された。



竹匙
薬の調合に使用されたもの。



薬箱「万金丹」
万金丹は腹下しの薬として服用された。



枡
丸薬を袋詰めするとき、数量を量るのに使用されたもの。



百目筆筒
薬を種別に整理保管するためのタンス。



折形
散薬の包紙のひな型。紙の折り方は薬の種類ごとに決まっていた。



行李
売り子が薬の行商に歩くときに使用されたもの。



版木「實母散」
薬袋を刷るための版木。實母散は産前産後などに服用された。



看板「養血圓」
養血圓は三澤家の主力商品で、銀座の著名な薬屋にも卸していた。